

カリナヤー



映画は大衆娯楽として人気を得るとともに、国や政府が求める理想像を伝えるメディアとしての役割も担ってきました。インドネシアも例外ではありません。スハルト大統領による強権的な統治が30年続く中で、政権末期には国产映画は年間に数本制作されるだけという瀕死の状態に陥りました。

民主化運動によつて1998年にスハルト大統領が辞任すると、政治改革や表現の自由化が進められました。国产映画も年間の制作本数が100本を越えるまで復活を遂げ、観客動員数が100万人を超える作品も年に何本も出ています。映画は新生インドネシアで社会の課題に向き合つて国と社会のあり方と行く末を考えるメディアという役割を積極的に担つてきました。

そうした社会の課題のうち私が特に关心を寄せているのは、父親の役割の見直しと「女性らしさ」の規範からの解放です。インドネシアで長期政権が続いたのは、軍や警察の力で国民を管理統制したこともありますが、国民の間に、インドネシアという国を一つの家族にたとえ、強い「父」である大統領が「子」である国民を厳しく教え導くという考え方があつたためもあります。民主化後のインドネシアでは、国政の政治改革が取り組まれるとともに、家庭内の父親像はどうあるべきかを主題とする映画が多く作られています。

また、家族の重要性が強調されることで、女性は「よき娘、よき妻、よき母」になることが求められてきました。その結果、例えば性暴力の被害に遭つた女性がいた場合、加害

あまりよく知らない外国について知りたければどうすればいいか。実際に現地に暮らされればいいけれど、なかなか簡単ではない。でもいい手がある。その国で作られた映画を見るのだ。スクリーンの中で展開する異国の風景や人々のドラマをたどることで、その国独特的文化や社会問題が垣間見える。今回の研究者は映画を「窓」として、インドネシア社会について考察している。

京都大東南アジア地域研究
研究所准教授 西芳実
(インドネシア研究)



にし・よしみ 1971年東京都北区生まれ。
東京大総合文化研究科博士課程地域文化研究専攻修了。博士(学術)。東京大助教などを経て2011年に京都大に着任。著書に「夢みるインドネシア映画の挑戦」(英明企画編集、21年)、「災害復興で内戦を乗り越えるスマトラ島沖地震・津波とアチエ紛争」(京都大学学術出版会、14年)など。



インドネシアでは、映画を友達と見に行つて一緒に記念撮影するのが定番という
(2017年9月、インドネシア・ジャカルタ)

性暴力被害女性、名誉回復物語も

インドネシアにはスンデルボロンと呼ばれるお化けの民間伝承があり、お化け映画は人気ジャンルの一です。作品ごとに細部は異なりますが、伝統的な農村を舞台に、夫以外の男に凌辱されて無残な死を遂げた女性がスンデルボロンになり、自分が凌辱した男たちを呪い殺すというのが基本パターンです。ただし、スンデルボロンは村人たちを恐怖に陥れた後で、警察や宗教指導者によって退治されます。被害女性に同情的に寄り添うものの、化けて恨みを晴らすことで社会の秩序を乱すことは認めないという決着になつています。

熱帯地方のインドネシアには珍しい西部劇風の「マルリナの明日」は、性暴力を受けた女性が加害男性に反撃する姿を描いて話題になりました。物語の舞台は、腕力の強い者が殺したり奪つたりする無法の荒野です。

解決のために彼女がとつた行動は、これまでのインドネシア映画の枠を大きく越えたものでした。情報技術を駆使して、違法な手段もいとわずに証拠を手に入れた彼女は、彼女らしいユニークな方法で、犯人を告癲するかわりに自分の境遇に対する共感者を求める道をとります。

私は、日本の読者向けにインドネシア映画を紹介する本を書いて一区切りがついたことで、これからはそれを印度ネシア語でも発信していく。印度ネシアで映画の人気は衰えを見せませんが、形式や役割は変化を迎つたり、オンライン配信で映画を見る機会も増えています。以前は映画といえば観客は完成品を見ただけで楽しむもので、感想は仲間内で議論にとどまつていましたが、今はSNSを通じて誰でも感想を発信できます。これにより映画の評価の重点も変わっていくかもしれません。

私は、日本の読者向けに印度ネシア映画を紹介する本を書いて一区切りがついたことで、これからはそれを印度ネシア語でも発信していく。印度ネシアで映画の人気は衰えを見せませんが、形式や役割は変化を迎つたり、オンライン配信で映画を見る機会も増えています。以前は映画といえば観客は完成品を見ただけで楽しむもので、感想は仲間内で議論にとどまつっていましたが、今はSNSを通じて誰でも感想を発信できます。これにより映画の評価の

す。夫をして一人で暮らすマルリナの家をならず者たちが襲い、マルリナを凌辱しますが、マルリナは反撃して男の首を刎ね、証拠の生首を手に持つて警察を訪れます。「マルリナの明日」は、首都ジャカルタから遠く離れた地方が舞台です。西部劇のような景観が物語の内容に合っている一方で、首都で暮らす観客たちにとって、自分とは直接関係ない世界の物語だという安心感を与えています。

2022年にNetflixで公開された「フォトコピー」は、都会の大学が舞台の、性暴力を受けた女子学生による犯人捜しと名誉回復の物語です。女子学生がサークルのパーティーで飲酒を勧められて断り切れず、酔つて意識を失った間に自分が他の人に見せたくない情報を盗撮されます。その情報がSNSで流布され、不品行を理由に選挙金給付が打ち切られます。処分の撤回を求めて自業自得だと責められます。